

日本語版への序文

『ソーシャルワークの倫理と価値』の日本語版序文をここにご紹介することを大きな喜びとしています。私は本書の翻訳を主に引き受けてくださった石倉康次教授（立命館大学）と翻訳の案をもって、彼と一緒にこれを実施してくれた伊藤文人准教授（日本福祉大学）、児島亜紀子教授（大阪府立大学）およびこの作業に助力してくれた立命館大学大学院生にも非常に感謝しています。翻訳するというプロセスは——とくにソーシャルワークのような、複雑な学術的かつまた実践に関連した諸言語をもつトピックを扱う時には、挑戦的かつ創造的なものです。本書で使用されているソーシャルワークの倫理と価値に関する諸言語と諸概念はしばしば異なる国々や文化間では容易に翻訳されません。献身的でなおかつ配慮の行き届いた翻訳作業に本書が出会えたのは、誠に大いなる名誉です。

本書を翻訳するアイデアは、伊藤文人准教授からのものでした。彼は長年日本で根源的で、他者への尊敬に満ちた、公正なソーシャルワーク実践の発展に関与してきた人物です。彼と彼の同僚のグループは、私も参加した2010年から2011年に実施された日英二国間セミナーにかかりました。2011年に東京へ伺った際に、日本の多くのソーシャルワーカーや研究者とソーシャルワーク実践に関する倫理的争点について議論をしたことは私にとって非常に有益でした。この二国間セミナーは、日英両国が直面していた共通の政策潮流トレンドに光を当てていました。それは新自由主義的な社会福祉政策によって福祉に対する国家責任が縮小されるに至り、貧困、不健康や失業の結果として、多くのクライアントが経験していた、「犠牲者を非難する」¹⁾文化的問題が増大していることを検討するものでした。

世界中でソーシャルワーカーは、生活の変化に直面している人びとと働いて

います。彼（女）らは、サービス利用者を支援し、アドバイスし、エンパワーすること、公的な保護のために利用者に統制的手段を強制する役割をもっています。このことは、ソーシャルワーカーをサービス利用者と一般的な公衆（the general public）にかかわる権力と責任のなかに位置づけますし、そのことが実践のなかでの多くの衝突や緊張に帰結します。ソーシャルワークの倫理は、ソーシャルワーカーがサービス利用者と社会に対して、より一般的な意味で、どのように彼らの責任を果たすのかに焦点を当てた明白な課題領域として発達してきました。ここで責任を果たすとは、どのような倫理が彼（女）らの実践や仕事を支えるのか、いかに彼女らは矛盾を乗り越え難い倫理的な決定をするのか、またいかに彼（女）らは日常を基盤にしてサービス利用者との関係をもつのか、ということです。このことは、ソーシャルワークの倫理的課題が、福祉や選択への個人と家族、コミュニティの権利を尊重・促進し、またサービス利用者とのケア関係を発達させるだけではなく、再分配の政治についても尊重し促進することを意味しています。

ソーシャルワークの核となる価値のひとつに社会正義があります。これは健康、地位、権力が現存社会のなかで不平等に偏在していることに対する異議申し立てであり、より公正な社会に向かって働きかけることを必然的に伴うものです。もしこの価値が実行に移されるのならば、ソーシャルワーカーは、資本主義社会におけるソーシャルワークの役割や、不平等、差別や抑圧が永続する社会構造や態度に異議申し立てをするための批判的で政治的な分析に関与することができる必要があります。これがイアン・ファーガソンの執筆した『ソーシャルワークの復権——新自由主義への挑戦と社会正義の確立』（Ferguson, 2008=2012）のテーマです。彼の本の第8章では、「倫理的なものの復権」とよばれた短い節がありますが、それは、市場価値や道徳的権威主義に抵抗する運動の一部として、ソーシャルワークの核となる価値を再強調することをよびかけているものです。このよびかけに対する一つの応答として、私が2011年の日英セミナー東京大会で発表したものがあります。それは「緊縮財政時代の倫理：ソーシャルワークとニュー・パブリック・マネジメント」（Banks, 2011）と題されたものです。ここで私は、私が「社会正義に位置づけられた倫理（a 'situated ethics of social justice'）」とよんだものに基づく進歩的なソーシャルワ

クにとっての一連の諸価値を提案しました。これらの諸価値は、本書の第3章の最後の方で詳しく述べられていますが、「ラディカルな社会正義」「共感的な (empathetic) 連帯」「関係上の自律性」「抵抗への集団的責任」「道徳的勇氣」および「複雑さや矛盾のなかで働くこと」から構成されています。

これらの諸価値は一方では社会正義に焦点をあてたり、出発点として構造的な不平等から形成されていますが、これらは多くのフェミニスト哲学者たちによるケアの倫理からインスパイアされています。とくに Tronto (1993) はケアの政治的な倫理という考えを発達させ、それは権力と抑圧の構造の文脈のなかでの人間関係に焦点を当てています。長い間、正義の倫理 (抽象的な原理と権利に基づく) とケアの倫理 (位置づけられた責任やケア関係に基づく) は対峙する傾向がありましたが、最近の研究は、エヴァ・フェダ・キティ (1999; 2011) によって具体化されているように、両者の補充代替および相関関係を論証したものが、それは本書の第3章で議論されています。

私が2011年に日本で出会った人びとの何人かは、ソーシャルワーク教育の一研究課題としての「倫理」とその実践上のテーマは、日本が北側の高度に発達した産業社会の一員 (the global North) に属しているものの、他の国ほど議題として高い地位を与えられていないことを示唆しました。このことは「倫理」によって私たちが意味するものとは何か、ソーシャルワーク倫理における国際的な諸声明の中に具体化された諸概念が、英国とは異なって個人主義が重視されていない国々や、ヒエラルキーや地位がより重要な国々に対して、うまく翻訳されるのかどうかという諸問題を提起します。これは本書のまえがきおよび「位置づけられた倫理 (Situated ethics)」という節で私が考察したトピックです。私は、日本の読者をご自身で日本の環境に見合った倫理的課題とは何か、本書のどの部分が日本の文化的、法的、経済的システムに適応させる必要があるかを判断されることを望んでいます。私はまた、日本のソーシャルワークを学ぶ学生、実践者および研究者たちが日本人自身の倫理テキストやケース事例を執筆するために互いに高め合ってもらうこと、そしてまた、日本のソーシャルワークにおける倫理的な争点についての批判的な議論に関与されることを願ってやみません。

(訳注)

- 1) 日英二国間セミナー（『New Public Management 政策の衝撃と専門職ソーシャルワークの視点：日英の経験の比較研究』）は、2010年度から2011年度に日本学術振興会および英国社会経済研究機構の助成を受けて、英国（スターリング大学）および日本（日本女子大学）でそれぞれ開催された。英国側からは、本書の著者サラ・バンクス教授を始め、イアン・ファergusン教授ほか計4名の研究者が来日した。このセミナーは、日英両国で継続する福祉国家の社会サービス削減とソーシャルワーク実践の枠組みに財政資源管理統制主義（マネジメント主義）のエトスを導入することから来る実践上の社会的、経済的、政治的、倫理的混乱と諸課題について批判的な検討がなされ、両国の共通性と異質性をめぐって議論が展開された。

詳細は、https://www.jsps.go.jp/jbilat/semin/data/h22_semin_houkoku/36_10JSESRC_Namae.pdf を参照されたい。

参考文献

- Banks, S. (2011) 'Ethics in an age of austerity: Social work and the evolving New Public Management', *Journal of Social Intervention: Theory and Practice*, 20, 2, pp. 5-23. www.journalsi.org/index.php/si/article/view/260
- Ferguson, I. (2008) *Reclaiming Social Work: Challenging Neo-liberalism and Promoting Social Justice*, London, Sage. (石倉康次ほか監訳 (2012) 『ソーシャルワークの復権——新自由主義への挑戦と社会正義の確立』 かもがわクリエイツ)
- Kittay, E. (1999) *Love's Labour: Essays on Women, Equality, and Dependency*, New York and London, Routledge. (岡野八代・牟田和恵訳 (2010) 『愛の労働——あるいは依存とケアの正義論』 白澤社)
- Kittay, E. (2011) 'From the Ethics of Care to Global Justice', in Okano, Y. and Kazue, M. (eds), *Justice rooted in an ethics of care: reconceiving equality*, Tokyo, Hakutaku-sha. (岡野八代・牟田和恵訳 (2011) 『ケアの倫理から始める正義論』 白澤社)
- Tronto, J. (1993) *Moral Boundaries: A Political Argument for an Ethic of Care*, London, Routledge.